大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

BalzacとZulma Carraud

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中堂, 恒朗 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011213

Balzac と Zulma Carraud

中　堂　恒　朗

(1)

Janita Helm Floyd 著 <Les Femmes dans la vie de Balzac> を読むと，Honoré de Balzac は，直接間接に多くの女性と交際をしたことが分る。その数は五十人を超えている。そしてその殆んどは貴族や有産階級の女である。

しかしここに Zulma Carraud という女性が居る。貴族でもなく金持ちでもない。平凡な庶民の女である。Balzac はこの女性と終生の友人であった。

(2)

彼女は結婚前の名前を Zulma Tourangin といった。1796年 Tours に生れた。Balzac より三つ年上である。Zulma は Balzac の妹 Laure (後の Madame Surville) と修道院時代に知り合い，少女時代の友達であった。その関係から，Balzac は Zulma を知った。二人の交友は，既に1819年頃よりあったらしい。

年代がつまびらかでないが，Zulma Tourangin は結婚して，Zulma Carraud となった。Monsieur Carraud は軍人で，大佐である。後に現役を退いてAngoulème の陸軍火薬工場の監督官をやった。そして更に後，これを退官して，Issoudun の近辺に隠退し，平凡な生活を送った。この人はお人好しで，<inactif> であったらしい。ありきたりの市民的幸福に満足し，冒険的なことは思いもよらない。

Balzac は，サルジニヤ島の廃銀鉱発掘の計画を Monsieur Carraud に話したことがある。大佐はこの計画を賞め，自分も Balzac に随行しようと云った。しかしよく考えるとこの計画は途方もない山師的なものである。遂に大佐は行かなかった。むろん Balzac はひとりで出かけて行ったが，惨憺たる結果に終っている。

Zulma Carraud はこの怠情な夫に不満であったといわれている。彼女は，夫に理解されない妻という風に自らを感じていたようだ。そのはけ口を，夫と全く対照的な性格の Balzac に求めていたと考えられる。しかし Carraud 夫妻は決して不幸な夫婦ではない。むしろ，平凡であるが故に幸福な夫婦だというべきだろう。

（3）

Balzac と Madame Carraud との間には，かなりの数の書簡が交されている。私はその書簡集を英訳で読んだ。"The Unpublished Correspondence, Balzac and Zulma Carraud (1829～1850)" という題の本である。J. Lewis May という人が飜訳している。

ここには友人同志の意見の交換が多い。そして，Zulma Carraud の，姉のような，時として母親のような情愛にあふれた調子が目立っている。Balzac に人生上の忠告をしたり，また，Balzac の作品を賞讃したり批評したりしている。

1832年 Balzac は，Faubourg Raint-Germain の錚々たる貴族である Duchesse de Castries にうつつをぬかしたことがある。この公爵夫人はブロンドの髪の毛の美人で，大へん coquette であった。Balzac が短軀肥満の体を dandysme に包んだのはこの頃である。

1832年9月の初め頃の，Balzac が Zulma に与えた手紙の中に，<…She [Mme de Castries] is a woman of the most refined type. Another madame de Beauséant, only better.…> とあり，Balzac は公爵夫人を賞めている。Madame de Beauséant というのは Balzac が創造した人物で，Bourgogne 家の錚々たる貴族で，失恋のために苦しむ憂愁の美女である（cf. <Femme Abandonnée> (1832), <Père Goriot> (1834)。

Zulma Carraud は，Balzac の執心に反対している。「あなたの望んでいらっしゃる女というのは，柔軟な体つきを持った女，媚惑的なしぐさの女，とびきりあでやかな言葉をいう女。そして，そんな繻子のようにつやつやした女の皮膚の中に，色どりゆたかな大らかな魂があるものと思ってらっしゃる。そんなことは，決してあなたのすることじゃありません。」(10 Sept. 1832)。Zulma のこのような言葉に対して，Balzac は反対している。

しかし，Balzac と Duchesse de Castries との aventure は，わずか9ケ月で決

裂した。詳しいことは不明だが，この事件の結果は，Balzac がひどく自尊心を傷つけられたようである。<Duchesse de Langeais>（1834）はこの事件を基にして書かれたものである。尤も，この小説の烈しく悲壮な結末は，現実にあったことではない。冷淡で自尊心が強く coquette な Duchesse de Langeais は，Duchesse de Castries をモデルにしたものである。Duchesse de Castries は遂に Madame de Beauséant ではなかったのである。

この事件後，Balzac は Carraud 家を訪れ，そこに暫く滞在し，彼の傷心を休めた。彼は Zulma Carraud の慰めを必要としたのに違いない。

（4）

Castries 事件の間，つまり1832年代には，Balzac と Zulma Carraud との書簡は頻繁に交されている。そこに先ず目立つのは女性論である。1832年11月28日附の，Zulma が Balzac に宛てた手紙の中に次のような文章が読まれる。「私のような女，私よりももう一寸女らしさのある女性，そんな人があなたには適していたんだわなんて私本当に思いますの。芸術家に必要な女というのは，利己的でない人で，次のようなことを心得ておかねばなりません。芸術家が現実の世界を離れて，仕事に熱中してらっしゃる時には，女はどんな風に自分を無にして主張を差しひかえたらよいかってこと。それから，芸術家が現実界にもどってくる時には，女はにっこりと笑って，芸術家を喜んで迎えてあげるべきだってこと。女はどんなことにでも，寛大であるようにしなくてはいけません。想像の世界に住んでいらっしゃる男の人は，時にはどうしても脇道にそれて彷徨するようなことがあるからです。でも，寛大さが出しゃばり過ぎるようなことがあってはいけません。寛大ってものは，寛大にされている相手の人に分ると，つらいものだからです。」

これは Madame Carraud が Balzac の傷心を慰めたものである。同時に，Balzac の欲望の方向が間違っていたこと，芸術家が伴侶とすべき女は，やさしく寛大な女でなければならないことを忠告したものである。

しかし，この忠告は Balzac に対してどれだけの効力があっただろうか。たしかにそれは Balzac の傷心を慰めたであろうが，Balzac は自ら <Duchesse de Langeais> という作品を書くことによって，この傷心を克服することを知っていた。そして，Balzac の欲望や芸術家の伴侶についてはどうかというと，彼は

今後二十数年間，ポーランドの貴族 Madame de Hanska という自尊心の高い，多少感能的傾向の強い女性をわがものにせんと，大いに苦しむことになるだろう。

Balzac のあの尨大な作品の中で，Madame Carraud が言ったような「幸福な例」が見られるだろうか。ない。David Séchard が聰明でやさしい妻 Eve と幸福に生活する場合，David は自らの野心や創造欲をあきらめている（<Les Illusions Perdues> III)。Louis Lambert は献身的なユダヤ女 Pauline de Villenoix と結婚するその前夜，気が狂ってしまう（<Louis Lambert>)。禁欲的で意志的な Daniel d'Arthez は duchesse de Maufrigneuse と恋するに及んで，彼の創作力は俄かに減退を来している（<Les Secrets de la Princesse de Cadignan>)。

Zulma Carraud の言は，夢物語なのだろうか。それとも Balzac には何か別の事情があったのだろうか。これについては後述する。

（5）

次に注目すべきは，「階級」のことである。Zulma Carraud は名もない庶民である。Balzac の交際した女性の中で，こういう種類の女性は数少い。Madame Carraud の所は固苦しいことはない。彼女は Balzac と同郷人で，Balzac の妹の幼な友だちである。母親を好まなかった Balzac にとって，Madame Carraud の所は第二のホームであったかもしれない。

ところで，Balzac と Madame Carraud との間には，一つ大きな意見の相違があった。それは政治上の意見である。Zulma は共和主義を奉じている。Balzac の思想は保守主義である。反革命の立場である。

Zulma の主義は，フランス革命が源であるあの熱列な市民感情に裏附けされている。当時の庶民として当然の政治感である。Balzac も庶民であり，貴族ではない。彼の名前にある de は彼が勝手につけたものである。しかし彼は成上り根性があった。その上彼は貴族や有産階級にしきりに出入りしたために，保守主義が彼にとって有用であったのである。彼は légitimiste の立場から代議士に立候補したことがある。失敗に終ったが。尤も Balzac は当時の反動思想に唯々諾々として応じていたのではない。彼の作品は上流階級批判に満ちている。それを読むと，彼が上流階級の腐敗を弾劾する立場の方に廻っているかのようである。Balzac に政治的信念と réalisme が乖離しているようにいわれるのはこ

のためである。

1830年末の手紙で，Balzac は Zulma Carraud に次のように書いている。<Even if wealthy classes, the hereditary aristocracy of the Upper House, become morally corrupt and create abuses, they are a necessary part of every society and must be borne with for the sake of their compensating advantage.>。これはいかにも Balzac らしい意見である。

Zulma Carraud は上流階級を良い目で見ていない。彼女が Duchesse de Castries に批判的であったのは，こういう所からも原因している。そして彼女は Balzac の政治的意見には，あくまでも反対であった。1832年6月16日附の手紙で，彼女は Balzac に次のように書いた。「自己の中に何かいい素質があると感じ，幅の広い高い見解を持っていながら，階級の偏見や上流のものの無能力や侮蔑のために，手足をしばられて動きもとれない人の苦しみをあなたは忘れていらっしゃる。あるいは多分御存知ないのでしょう。自分自身の罪からでもないのに，この有能な人は，階級偏見などの犠牲になっているのです。独立独歩でやってきた私は，人民の中でも一番鈍重で一番無教育な階級と一般にいわれている所で育てられたのでした。……」。

ここには Zulma Carraud のひがみが多少見えているが，これ自体としては間違った意見ではない。しかしこの意見が特に Balzac にいわれたということは私には奇妙な気がする。Balzac はそういう苦しみを知らなかったどころではない。Balzac こそそういう苦しみを経験してきた人間なのである。そしてこの人生経験の故に，Balzac という小説家は当時のフランスでは特異な存在なのである。

少し長いが，Ferdinand Brunetière の言葉を引用しよう。「こういう種類の経験こそ，彼の先駆者である小説家たちに欠けていたものである。彼等は，Le Sage から Mme Sand に至るまで，全く有産階級然として生活していたのである。従って，彼等の描く労働や，或いは貧困ですら，ただ書物から得られたおきまりの形式が認められるに過ぎなかった。（中略） 昔は人が文人になろうとする時には，«gentil homme» になったものであった。Rousseau のように剣を以て戦う程の意気込みを見せた所で，一夜にして従者や召使の務めをお払い箱にされる位が関の山であった。Balzac の時代には文人は少くとも «bourgeois» になった。彼等は自由業の仲間に入ったのである。そして彼等は少し高い所から，

（中略）汗水垂らして働く仕事や『毬猫屋』の看板をかかげて布地を売る商人を眺めていた。こういうような理由のために，小説には実体と生命が欠けていたのである。所がこの小説というものは，恐らくあらゆる genres の中で，その根を現実の中へ最も深く下ろして行かなければならないのである。小説は（中略）実際生活をほんのうっすらと模写したに過ぎないものであったのだが，それは大部分の小説家が自ら実際に生活しなかったからである。（中略）彼等は一般に，学校を出ると文人になり，彼等の仕事部屋の奥から，側を通り行く生活を傍観するような状態に置かれたのであった。しかし，Balzac は，彼こそ真に生活したのである。彼の経験は実際的であり，有効であった」（<Balzac> ch. II. PP. 38～39. 筆者訳）。

Zulma Carraud は Balzac の才能を高く評価していたけれども，彼女には Balzac の <vie> を洞察する力がなかったようである。尤も，彼女にしてみれば無理もなかったかも知れない。彼女の前に現れる Balzac は，少し甘えたで，くつろいだ Balzac であったから。

Balzac は根は楽天家で，野心満々で，いつも前向きに生きている。一方 Zulma Carraud は，ともすればぐちをこぼしがちな人妻であり，結局は諦観的な幸福に甘んじなければならない平凡な生活人である。二人の心理にはお互いに異質なものがある。こういうデリケートな所まで考えて，二人の書翰を続むと，政治思想の対立というようなことよりも，もっと面白い相互のくいちがいがあるのに気付く。お互いにそれとは分りつつも口では少し言いにくいというような，また言っても無駄かも知れないというようなものが。考え出すといらいらするような「理解不通」が。

（6）

Zulma Carraud は，文人や芸術家を何か絶粋な人間という風に考えていたようである。Balzac が金を儲けようとしたり，女に熱をあげて伊達男になったり，選挙に打って出て代議士になろうとしたり，そういうようなことをするのは文人らしからぬことのように思っていたようである。Zulma はこのことについてしばしば忠告めいた文を Balzac に書いた。Balzac はそれに対して弁解じみた返事を書いた。1832年9月23日附の手紙には，次のような Balzac の文が見える。

<……I am not a man to be corrupted either by money, or by a woman, or a plaything, or by the government.……You may rely on that. I always look on my life as a whole and rate my self-respect above all else in the world.> <Do you imagine money can repay me for my labour, for my health? No! No! I value above everything the pleasure of giving *an added thrill** to such a heart as yours, and if my imagination as an artist sometimes carries me away, be quite sure about my coming back, and with love, to the beautiful and the true.>（＊この箇所は，良い英訳でないように思う。この辺の意味は，読者をはらはらさせるような面白い小説を書くという喜び，というようなこと。）<I tell myself that if I am to live my life I ought not to be tied up to any woman's apron-strings, that I have got to pursue my destiny with a free and open mind and fix my gaze higher than a woman's girdle.……> (translated by J. Lewis May. pp. 90～91)

これを要するに，Balzac は彼の世俗的な現実の行動にもかかわらず，創作することを，何よりも最高のものと信じていたということである。彼の伝記を読む人は誰でも，彼の世俗的な行動が実におびただしいということに気付く筈である。そしてそれにもかかわらず彼があのように尨大な作品を書くことができたことを知るとき，このようなことは一個の人間にとって殆んど奇蹟的なことだと唖然とせざるを得ない。

Balzac の世俗的行為の多くは失敗であった。金銭のことにしろ，恋愛のことにしろ，政治的野心のことにしろ。しかし彼は創作することによって，この失敗を克服したといってよい。あの Castries 事件の失敗が，<Duchesse de Langeais> によって克服されたように。

Balzac が「書いた」人といわれるのは，こういう意味でなければならない。世俗的に生きることを犠牲にして，「書いた」のではない。それは Flaubert の場合である。Stendhal はどうか。Stendhal の現実の行動には，世俗的でないもの，何か高貴なものがある。彼は彼の同時代から認められようとは思わなかったから，彼は自由であった。それだから，Stendhal の日記や自叙伝は，彼の創作と同じように，「文学」となり得る。しかし，Balzac は書かなければならない。そうしなければ彼は一介の俗人である。Balzac の「人間喜劇」が，俗物性に対する苛酷な批判のような印象を与えるのは，単に彼がその鋭い目で俗物性を観察した結果から出ているのみではない。彼自身の中にある「俗物性」が，

彼の書くという行為によって克服されているからである。

（7）

Balzac は，「生活する」ことと「書く」ことを，厳しく区別していたように私は思う。

「創作家は禁欲的でなければならない」という意味のことを，Balzac は Théophile Gautier に語ったのは有名である。しかし Balzac はその生活において，少しも禁欲的ではない。彼の豊富な人生経験は，彼の欲望のおびただしい浪費である。この言葉は書く人 Balzac のものに違いない。

Balzac は創作するには強い意志が必要であると考えていた。本能や環境に溺れてはいけないと考えていた。禁欲と忍耐を重んじていた。偉大な仕事をするには，精力の蓄積と集中が必要だと信じていた。

精力の蓄積と浪費，生産と不毛，こういう問題は，Balzac の初期の作品<La Peau de Chagrin> のテーマであり，また，「人間喜劇」全体で，かなり一貫したテーマでもある。

<Illusious Perdues> II において，Daniel d'Arthez は Lucien de Rubempré にいっている。

<Buffon l'a dit, le génie, c'est la patience. La patience est en effet ce qui, chez l'homme ressemble le plus au procédé que la nature emploie dans ces créations. Qu'est-ce que l'Art, monsieur?, c'est la Nature concentrée.> <On ne peut pas être grand homme à bon marché.……Le génie arrose ces oeuvres de ses larmes. Le talent est une créature morale qui a, comme tous les êtres, une enfance sujette à des maladies. La Société repousse les talents incomplets comme le Nature emporte les créatures faibles ou mal conformées.> (p. 70)

よく耐えたものが，よく実るのである。不完全なものは遂に拒否される。芸術作品は，自然における作物と同じである。

同じく <Illusions Perdues> II において，Balzac は書いている。

<……Quand un homme perd la tête au milieu de ce désordre moral, il est perdu. Les gens qui savent résister à cette première révolte des circonstances, qui se roidissent en laissant passer la tourmente, qui se sauvent en gravissant par un épouvantable effort la sphère supérieure, sont les hommes réellement forts.> (p.

330)

これは Lucien de Rubempré の弱気を批判した箇所である。Lucien の失敗の一因は，環境への抵抗が欠けていたことにある。彼は環境が彼に与える色々の苦しみを，受働的に苦しんでいる。その苦しみを彼の意志によって解決せずに，環境を変えることによって処理しようとした。そこで彼は更によい環境を求めて彷徨した。彼はせっかちで，浮気で，虚栄心が強かった。彼は忍耐して書くことを怠った。

<Lucien est un homme de poésie et non un poete, il rêve et ne pense pas, il s'agite et ne crée pas.> (p. 395)

こういうわけで，Balzac にとって創造する者は，強力な意志を持ち，ストイックな人間であることが要請された。そして何よりも travail が肝心なのである。

<Le travail constant est la loi de l'art comme celle de la vie.> (<La Cousine Bette> p. 244)

Balzac は，そこから更に，創造者は恋愛衝動に対して極めて厳しくなければならないと考えた。<chasteté> を力説するのである。<chasteté> は人間の肉体的精神的力を増大するからである。それゆえ，Balzac は，社会を豊饒たらしめない célibataires を非難したけれども，偉大な人間には独身を認めた。solitude に耐えること，そして solitude の中においてのみ，真の創造が可能であると考えた。(こういうことについては，M. B. Ferguson <La Volonté dans la Comédie Humaine de Balzac> に詳しい。特にその ch. V)。

Balzac のこういう思想的な面を考え合わせると，彼が Zulma Carraud に書いた弁解じみた言葉には，彼特有の強力な哲学の裏打ちがあったことに気付くのである。しかし Zulma からはそれが見えないのである。

(8)

こういうわけで，Balzac にとって，書くということが彼に凛然たる主体性を与えていたのである。

しかし，私は先程，Balzac には「生活」と「創造」との分離があると書いた場合，少し軽卒過ぎていたのではないかと按じる。なぜかというと，Balzac のあのような厳格な創作者のモラルを知ったいま，畢竟 Balzac という人間は，

偽善者ではないか，彼の俗物根性は創作においてすら徹底しているのではないかとふと思うからである。私は Balzac のために，そうでないことを願うものだが，とにかく私は，Balzac は「生活」においても「創造」においても，いやそれらの分離のゆえに，幸福ではなかったと急いで附け加えておこう。

一方において浪費的に生活し，他方において猛烈に創作し，しかも生きることと書くこととを分離しようとすることに，一個の存在はよく耐え得るであろうか。単に生活するということが，仕事からの divertissement であったり，創作のための意識的な経験であったり，あるいは余儀ない義務であったりする場合であるならば，いざ創作という段には，そういう生活から se détacher することは比較的容易でもあろう。(いや，こういうのもなかなか容易でないかもしれない)。ところが，Balzac の生活はそれ自体（つまり創作活動を換算しないで)，甚だ忙しく，豊富であり，波乱に満ちている。一体彼の創作時間がどこから湧いてくるのかしらと怪しむくらいである。

それは夜であったのだ。猛烈に濃いコーヒを胃の中に溶かし込んだ，異様に眼覚めた夜なのだ。Balzac の文学は，その適確な現実認識にもかかわらず，全体として奇怪な幻想性を漂わせて読者を陶酔させるのはこのためである。それは夜の文学である。

ここまで考えて，私は更に Balzac の姿を見つめて行こうと思う。

(9)

Balzac は陽気で楽天的な人間である。よく喋り，よく笑った。大へん naïf な印象を与え，人から好かれたそうである。当時 Balzac と交際した人々が，殆んど一致して証言していることである。洗煉された社交術というもの彼にはない。持ち前のゴーロア的な気質の致す所である。

彼は女を愛し，金儲けに執心し，サロンを好み，パリーを愛した。現世を享楽するのが生活者 Balzac である。もし彼がもう少し節度を守って終始生活者としとどまったとしたならば，彼は一介の幸福な bonhomme に過ぎなかったであろう。

しかるに，彼が仕事部屋に帰ってくると，彼の顔は俄かに変る。grave な表情である。あの神妙な哲学の御宣託で，彼の性格まで変ったみたいである。彼は意志的であり，禁欲的であり，生産的である。その部屋は深夜の時刻をきざ

んでいる。彼は白い寝間着を着込んで坊主のような恰好をしている。彼はどろどろのコーヒを何杯か飲む。やがて頭は冴え，目は異様に光り出す。彼の想像力は躍動し，彼の筆が疾駆する。これが創造者 Balzac の姿である。もし彼が終始作家としてとどまったとしたならば，彼は Flaubert に輪をかけたような人間になったかも知れない。

私はジーキル博士とハイド氏を Balzac に見ようとするのではない。そうではなくて，こういう Balzac の態度に，宿命的な悲劇といったようなものを見るのである。

先に Brunetière の言葉を引用したように，Balzac の小説は，彼が実際に生きたものから得られた実感や認識を織り込んでいる。彼の経験は，彼の創作への強力な契機となっている。<Duchesse de Langeais> はその一例である。しかも，Balzac は書くことによって，彼の生きたものを克服しなければならなかった。彼の雑多な経験は，彼の創作の中に滋養として吸収されてしまうと，捨てられ忘れ去られてしまうものである。Balzac が oubli ということを非常に価値あるものとして力説するのはこのためである。忘却，それは清算である。Gaëtam Picon は書いている。

<Il semble que Balzac ait voulu dire au début de son œuvre tout ce qu'il avait à dire de la vie qui l'avait procédée, qu'il ait voulu se débarrasser une fois pour toutes du «je» et de l'expérienee vécue, comme si l'œuvre, eusuite, devait se nourrir d'une imagination soustraite aux vicissitudes et aux partialités du vécu.>
(<Histoire des Littératures> III p. 1060)

Balzac は何か経験すると，それはもう彼に書く必要を追っている。それは烈しい創作衝動となって彼を追い立てる。生活者 Balzac から創作者 Balzac への転換には，鞭打つような強制がある。遊ぶ子供が無理やりに勉強部屋に追われるように，陽気な生活者は仕事部屋へ追い立てられてゆく。彼の仕事には強制労働のような苦痛がある。彼の書簡を読むと彼はそこに屢々この苦痛を訴えている。その上彼の書き方は不幸だった。一度書いたものを何回も校正し，そのたびに原型がものすごく膨脹してゆくあのやり方だ。彼の文体は，完全に向って絶望的に猛進してゆくものだといわれる (Alain)。Balzac は Stendhal のように，みずみずしく爽やかに書くことができなかった。Stendhal にとって書くことは plaisisr であった。Balzac では苦痛である。

人はよく Balzac に借金がなければ，彼はあのように無茶に書く必要はなかったろうという。しかし私は，彼の創作の必要を，借金にだけ限定して考えるのは浅い見方だと思う。その必要は，如上に書いたように，もっと内部的な所から起っていると私は考えたいのである。

Balzac は現実に行動しているときには，これこれのことは書かなければならないと思うだろう。又，彼が書いているときには，生活の中にこそ自由があるだろうと思うだろう。Balzac においては，「生活」と「創作」のつながりは，果しない因果関係のようなものである。Balzac という存在は，この因果の輪をぐるぐる廻って始末がつかないという宿命を背負っている。Curtius はいっている「Balzac は彼の作品に栄養を供しているところの夥しい分量の体験をば芸術家として完全には統御することが出来ないのである」(p. 365) 「Balzac にあっては生活の使命と作品の要求との間には痛ましい喰い尽すばかりの烈しさがある。如何なる調和もまた如何なる悲劇的浄化も彼には可能ではなかった。即ち——人間 Balzac は彼の作品の殉教者である」(p. 373. 大野氏訳)。

Zulma Carraud の前に現れる Balzac は，くつろいだ Balzac であった。そういう Balzac から，痛ましい Balzac の姿を垣間見ることが彼女にできたはずはない。

(10)

Balzac は，「生活」と「創作」の果しない悪循環を立ち切りたいと望んだ。それは，彼が北国の女性 madame de Hanska を恋し，彼女を得たいという烈しい欲求から起ったものである。彼の尨大な書簡集 <Lettres à l'étrangère> (三巻) を読むと，後年になればなる程，彼が恋人を得て平和に幸福に暮したいという望みが強くなっているのが分る。

もしも Balzac がずっと早い目に Madame de Hanska と一緒になることができ，そして，Hanska が Balzac にとって理解ある伴侶となることができたならば，Balzac は David Séchard のように幸福になることができたであろう。しかしその場合には，Balzac の作品は現在見られるよりもずっと少くなり，また余程違ったものとなったであろう。諦観した Balzac，そんなものは我々には想像もつきかねることなのだが。

不幸にして (後代にとっては幸いなことだったかもしれないが)，二人が結ば

れたのはおそすぎた。Balzac が Hanska を知って以来，実に二十数年たっていた。Hanska の夫が死んでからでも（1841），九年たっていた。彼等が結婚したのは1850年3月のことである。しかもそのとき Balzac は頻死の重病人であった。1850年8月19日，遂は力尽きて Balzac は死んだ。

ここで（4）の所で引用した Zulma Carraud の手紙を振り返ろう。あの芸術家の伴呂についての手紙を。そこには確かに，女性らしい洞察で幸福への秘訣が語られていた。たとえ彼女は Balzac を十分に理解できなかったとはいえ，Balzac は彼女が語ったような幸福を求めるようになったのである。しかし Zulma の言葉は美しすぎた。そして Balzac の現実は悲惨すぎた。

(11)

Balzac と Zulma Carraud との間に交された書簡は，Flaubert と George Sand との間に交されたものよりも，面白くなく高度に知的な所もない。しかし，そこには，お互いに意見が喰い違った所があるけれどもお互いを認め合い，お互いに理解できない所は心情の暖かさで包んでおこういう清らかさがある。Zulma は平凡な庶民であるが，Balzac が交際した多くの女性の中で，Balzac に真の affection を持ち続けた非常に数少い女性の一人である。

＜Such was Balzac's truest, and one of the noblest women that have ever entered into the life of a man of genius＞ (translated by J. L. may)

と Marcel Bouteron は書いている。

1850年3月，Balzac は Poland の Wierzchownia（そこは Madame de Hanska の居た所）より，Zulma に最後の手紙を書いている。そこに次のような文が見える。

＜……We can tell ourselves that good and evil fortune are but modes of being, in which great hearts are conscious they are living to the full; that a stout philosophy is needful in one case as in the other, and that adversity, when we have true friends to call our oun, is perhaps better than envied prosperity.＞ (p. 390)

Madamc Zulma Carraud は，後年児童教育のために尽したということあでる。彼女は永生きして，1889年4月24日に死んだ。〔終〕

参 考 文 献

Janita Helm Floyd: Less Femmes dans la vie de Balzac, Paris, Plon. 1926.

The Unqublishe Correspondence, Balzac and Madame Zulma Carraud. 1829-1850.
translated by J. Lewis May. London. The Bodley Head, 1937.
Ferdinand Brunetière : Honoré de Balzac. Paris, Calmaun-Léry. 1906.
M. B. Ferguson : La Volonté dans la Comédie humaine de Balzac. Paris, G. Courville 1935.
Lettres á l'étrangère (vol. III). Paris, Calmann Lévy, 1906-1933.
E. R. Curtius : Balzac. (1923). 大野素一氏の訳本を参照。
Histoire des Littérature III : nrf. 1958.

Balzac よりの引用文は，主に Conard 版又は Éditions Sociales 版によった。